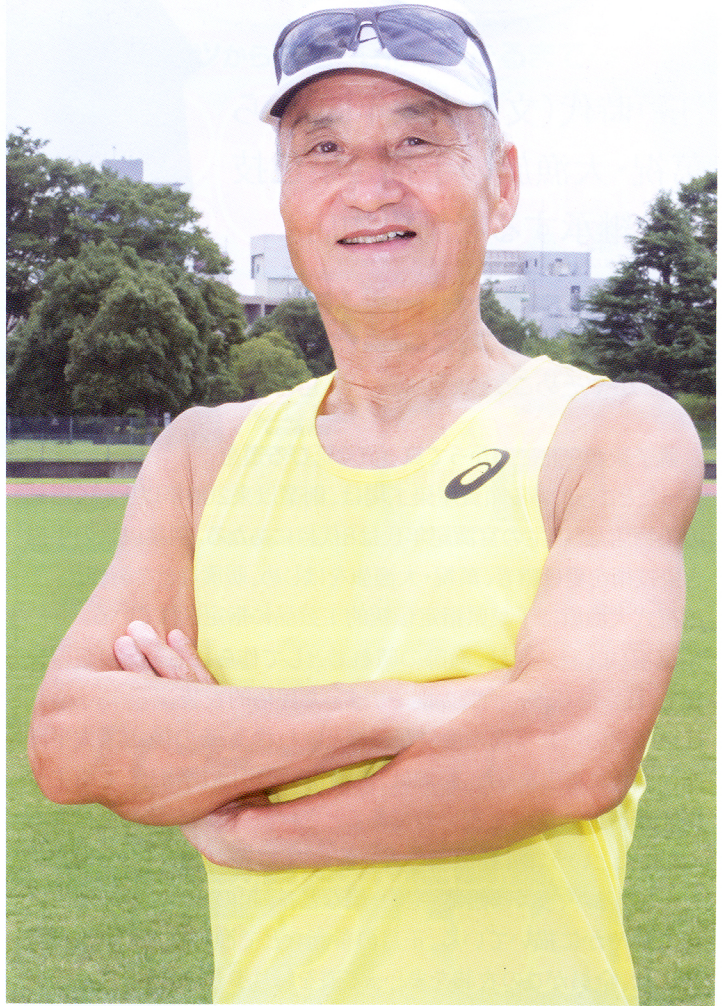


元気の源(みなもと)。



川端忠義(かわはただよし)さん
現在年齢 78歳
昭和17年(1942年)生まれ
座右の銘:「感謝」。

□北海道常呂郡常呂町(現北見市)で農業を営む父のもと、7人兄弟の末っ子(四男)として生まれる。地元で育ち、釧路の工業高校卒業後、2年間働いた資金で東京に出て勉強のち、航空関係に就職。羽田空港から全国各地を転勤し、最後に成田空港勤務となり、印旛郡酒々井町に居を構える。53歳でマスターズ陸上と出逢い、終生の友となる。退職後は読書に熱が入り、2019年は152冊を読破、更に新聞のコラムの書き写しを現在も続けている。

【マスターズ陸上競技記録】
1955年千葉県記録会1000mで優勝。1996年全日本選手権4×100mリレーでは日本新で優勝。100m:200m:400m:4×100mリレーの競技種目で毎

年優勝し続け、千葉県新はもちろん各県で大会新を数多く残す。また、2012年アジアマスターズ陸上選手権大会で金メダル3個(全て大会新)と銀メダル1個で計4個のメダルを獲得する快挙。コロナ禍で2020年は競技が中止だが、直近では2019年全日本選手権200mで優勝。

■幼少の頃から走るのが好きだったそうですね。

【川端さん】育ったところは自然がいっぱいで、いつも走り廻って遊んでいました。近隣の小学校の生徒が競い合う学校対抗リレーがある運動会が大好きで、いつも代表選手になり鼻高々でした(笑)。家庭の状況は、6歳の時父が事故で亡くなり、母を中心に家族、親戚で農業を続けながら生計を立てていました。高校を出たら就職するしかないと思い、花形企業の石炭関係へ進むべく釧

路の工業高校に入學。しかし、実習で炭鉱に入り、その狭さと暗さに怖くなり、逆に大空にはばたく飛行機関係の仕事がしたいと思いが募り、卒業後一念発起し東京へ向かい、航空関係に就職しました。勤務地は羽田から始まり千歳、大阪、成田と転勤生活が始まりました。

■膝を痛めたことが、人生の大きな転機になったそうですね。

【川端さん】46歳になり成田から沖縄へ転勤し、人生観が大きく変わりました。なんといっても寒さが苦手になった(笑)。仕事では現地の部下を指導する立場になり奮闘するも、沖縄という歴史的背景もあって内地の人間の私にはなかなか心を開いてくれませんでした。それまでは無口なタイプでしたが、そんなことは言ってもらえません。コミュニケーション能力に磨きをかけざるを得ませんでした。そして、膝の痛みの発症

が陸上競技と出会わせてくれました。沖縄で治療を始め、それから筋力トレーニング等を経て、3年位たってランニングを始めました。膝の痛みが消え、気持ち良いと思った瞬間が陸上競技人生の始まりでした。成田に戻り、53歳で中台陸上競技場からスタートでした。最初は中距離1500mとトライし、マスターズでは記録をとってみると、マスターズでは70歳代の記録でがっかり、同じきついのなら短距離だと即路線変更したのが良かった。マスターズの関係者から声が掛かり1995年のデビュー戦で100m初優勝。舞い上がりましたね(笑)。それからアスリート一直線です。今年で選手生活25年です。全国各地の多くの友が、自分にとっての一番の宝物です。

■退職してからは陸上、そして読書と文武両道に励んでいるそうですね。

【川端さん】もともと読書は好きでしたから、62歳で退職して午前中は運動午後は読書という生活です。毎年130冊以上は読んでますね。68歳からは新聞のコラムの書き写しを始めます。知識が豊富になり世界が広がり、友とのコミュニケーションのネタに尽きることはありません。そんな友と繋がる陸上競技はかけがえのないものです。我を忘れて無の境地になり、無条件で楽しい。常に高みを目指し、練習メニューも工夫し変え続けるから、ボケ防止にもなっています(笑)。夢を見続け、友と語り合う豊かな人生の道を選び続けます。

【取材を終えて】

常に空を見上げ、ゆるぎなく前を見続ける。グラウンドの上に立つと、眼の輝きがひときわ違う。全身に降り注ぐ太陽が、生きるエネルギーを創造する。川端さんの逞しさに圧倒されたひとときでした。